

庭からの旅

庭 への旅

宇宙樹——世界のまんなかの樹

冬の樹立ち

木枯しが樹々の枝に残る黄金色の葉を一気に吹き払ってしまうと、残った樹々はその幹や枝を空にむけて伸ばして、自分の骨格の広がりを目にします。散り敷いた落ち葉がやがて朽ちて還ってゆく土の下にも、樹は深く根を張って、自らをしっかりと大地につなぎとめています。陽や風、雨をうけとめ、ざわめきを奏でる葉がない分だけ、冬の樹立ちは我々を見下ろして、その伸びてゆく先をきっぱりと示しているように思えます。

もちろん葉をすっかり落としてしまう樹ばかりではありません。常緑樹でも風が霜を運んでくる季節になると、枝は伸びることをやめ、冬の眠りにそなえて成長点を冬芽の鎧の中にしまいこみます。春、次第に高くなっていく太陽を見上げていた枝は、自分を凍てつかせる風が足元に吹き込むのをじっと見下ろすようになります。

こんな冬枯れの樹々を見上げていると、それにしても樹と人とは何と似ていることかと思えてきます。まず一つには直立しているという点において。もう一つは枝葉や手を伸ばして食べ物を手にいれようとする点において。

ヒトの進化の歴史の中で、「直立歩行」はヒトとサルを分かつ大きな展回点とされていますが、ヒトはそれによってコトバや道具を生み出す大きな脳を手に入れることになりました。いっぽう、樹が直立することによって手に入れたものは、もっと直接的に「高さ」すなわち彼らの食料のもとである「光」だったのです。

そして、樹が「高さ」を獲得したことによって、それまで天と地との単なる境界であり、横への広がりしかもたなかった地上は、高低の差をもつ三次元の世界へと変貌したのでした。しかもそれはヒトが生まれるはるか以前のことでした。

生物の進化の歴史の中で、その形態が非対称性を獲得していくことは、進化がすすんだということを示しているといわれています。例えばアメーバには天地左右、どこをひっくりかえしてみてもどこを向いているという方向性はなく、非対称性がない、といえます。ところが少し複雑な多細胞生物や植物になると、体に成長の軸という方向性がうまれてきます。栄養を摂取する部分と排泄する部分が同じではなくなり、体の向きというものが生じます。草や木の伸びてゆく方向が一定であり、天と地をひっくりかえしては生きてゆけないのもこのことを示しています。

さらに進化がすすみ、ヒトやその他の高等動物になると、上下の非対称性に前後の非対称性が加わります。高等動物には顔があり、その向いている方向が前となります。もし人間に顔がなければ、前後の感覚は生じませんし、同時に左右を分ける対称面も存在しないことになります。顔がなければ、我々の左手、右手を各々左手であり、右手である、ということはできなくなるのです。

こう考えてくると樹はその形からみて、人間に似ているけれども、人間が最後の非対称性を獲得する前の姿、つまり「顔のない人間」である、ということが出来ます。樹こそは人の住む三次元の地上空間を生み出してくれた恩人であり、その姿も我々の祖先と呼ぶにふさわしい存在なのです。

宇宙の樹 イグドラシル

北欧の神話の記録「エッダ」によると、世界の中心には一本の巨大なトネリコの樹「イグドラシル」があり、この樹は世界の軸となり、支柱ともなって世界を支えているといえます。

イグドラシルは三つの宇宙領域（天・地・地下）の中心に立っている。そして、その三つの巨大な根はそれぞれ三つの地下世界へと深くおりる。ひとつは冥界すなわち死者の国であり、ひとつは眠れる巨人たちの王国であり、ひとつは神々の住む地下世界つまりエシルである

——中略——

イグドラシルの樹の幹は第二の宇宙領域ミドガルド、つまり生きとし生けるものの住む地を通り、その枝は神々の住む天空アスガルドに向けて広がる。樹の根もとにはミミルの泉（追憶）があり、オーディン（すべての神々の父である神・著者註）はそこで片眼を犠牲にし、ひきかえに知恵を得たのである。

（「生命の樹 中心のシンボリズム」 ロジャー・クック著 植島啓司訳 平凡社）

世界の神話には、人間が生まれるはるか以前から世界の中心に一本の巨大な樹がたっており、その枝葉は天空を覆ってあらゆる生き物をその葉陰に養い、その根は地下深く根づいて世界を支えている、という共通のモチーフが数多く残されており、この「イグドラシル」はその典型とされています。もっとも「イグドラシル」は世界の中心にあると同時に、世界そのものでもあり、宇宙自体がひとつの樹の象をしているというシンボリックな性格ももっています。

この宇宙樹のモチーフは、様々な意匠をともなって昔から絵や建物の装飾に使われてきていますが、身近なところでも、例えば宮崎駿監督の映画「天空の城 ラピュタ」に登場し、ラピュタを中空で支えている巨大な樹にそのイメージが投影されています。また、宗教の世界では類例が多く、インドではストゥーパと呼ばれる仏塔は、日本に入ってきて寺院の塔に姿をかえて信仰を集めていますが、これも宇宙樹を象徴的に形にしたものだといわれています。

このように手をかえ品をかえ、我々の生活の中に登場する宇宙樹ですが、そのイメージは実際の樹のどんな性質に負っているのでしょうか。

樹はまず、天地をつらぬく一つの中心軸を形づくりします。先ほど引用した「生命の樹」によると、中心とは「絶対的なはじまり」の点であり、「聖なるものの隠されたエネルギーがはじめて私たちをとる」場所です。したがって樹は「始源」の象徴とみなされることになります。また、ここには我々のような前後の感覚が存在しませんから、その感覚によって生みだされる時間の感覚をも超越していることになります。そのため樹は永生の象徴とみなされ、宇宙と同じ永さを生きる永遠の存在とみなされるのです。

樹は、豊饒と再生の象徴でもあります。樹のもつ驚くべき再生能力は、冬枯れの樹々が春になると一斉に芽吹いて一晩で緑の装いに還るのを見れば、誰の目にも明らかです。各地の民話の中にも、樵夫が一日では切り倒せなかった巨樹を翌朝訪ねてみると、昨日の斧のあとが見る陰もなく癒えていた、というエピソードが多く残されています。

また、樹を、体のどの部分を切り落としても切り落とされた部分と残った部分の双方から完全なもとの姿が再生される水生動物の「ヒドラ」や、樹の芽と同様、ポリプと呼ばれる部位を通して巨大な礁をつくりあげるサンゴにたとえて、その再生による生命力をたたえたのは、昆虫記で有名なアンリ＝ファーブルでした。

いま一つ、樹は神々の住む天空と、我々の住む地上を結ぶことから、神々のメッセージをつたえる依代としての役割も果たしてきました。先ほども触れた寺院の塔がその役割を果たしていることは明らかですが、例えばヨーロッパで古くから行われているメイダンス（五月の舞踊）も、メイポールと呼ばれる棒のまわりを踊りまわりながら、その年の豊凶を占うという樹をめぐる祭儀のひとつでした。この神の依代としての役割から、宇宙の樹は、もう一つ、別の神話を生み出すことになります。

生命の樹、智恵の樹

旧約聖書「創世紀」によると、エデンの園には生命の樹のほかにもう一本の樹があり、それは人がその樹の実を食べると神のように善悪を知ることになる「智恵の樹」でした。アダムはその樹に棲む一匹の蛇にそそのかされたイヴのすすめによってその樹の実を食べ、楽園を追われて死と再生を繰り返さなければならない荒野での生活を強いられることになります。そして、その実を食べると永遠の生を得られるという、もう一方の生命の樹への道は、神によって閉ざされてしまったのです。

では、智恵の樹は、人を永遠の楽園であるエデンから追放させた呪いの樹だったのでしょうか。興味深いことは、聖書の様々な解釈の中で、生命の樹と智恵の樹は始めから二本の樹として記述されていたものではなく、はじめに智恵の樹があり、後から生命の樹についての記述が加えられたという見解があることです。二本の樹は、もともと宇宙の樹のもっていた二つの側面をあらわしたもので、生命の樹の要素である永遠の生とは、智恵の樹から得られた智恵によってはじめて見いだされたものなのです。

宇宙の樹が実現している全体性は、その中に位置をしめる一つの芽でしかない我々個人にとって、決して到達することができないという否定的な側面ももっています。進化によって非対称性を獲得した人間は、結局その祖先である樹の完全さに到達するために、同じ道を何度もまわる（＝死と再生を繰り返す）他はありません。そして、智恵の樹とは、一つの芽として、決して樹全体と合一する（＝永遠の生を得る）ことのない我々人間に対して、樹が示してくれる一つの方向性、つまり樹の顔であるといえます。

人がエデンの園を追われたのは、背中あわせにありながら決して手にいれることのできない生命の樹の実を得るための、もう一つのまわり道を探すためであり、その導き手となったのが他ならぬ智恵の樹のくれた智恵だったのです。我々がこの智恵の樹を忘れていないことは、毎年歳末が近づき、人が新年の準備に奔走する頃、必ず思い出すことができます。

私たちはいまなお、善悪を知る樹を毎年のように家庭に飾り、死にかけた冬の太陽を復活させる儀式さえも行っている。その儀式は、いまクリスマスと呼ばれる。それが古い世界樹の名残りであるクリスマス・ツリーに隠された、本来の意味なのである。

（植物の世界 24 巻 朝日新聞社より「世界樹の神話」荒俣宏 著）

メイポールをめぐる踊る春の祭礼メイダンス（イメージの博物誌 15 生命の樹 中心のシンボリズム ロジャー・クック著 植島啓司訳 平凡社より）

寺院の塔も「宇宙の樹」を象ったものである（奈良県・百済寺三重塔 撮影：奈木野陽一）

©ごろくと工房